神奈川県立こども医療センターオレンジクラブ

ボランティアニュース



発行 神奈川県立こども医療センター オレンジクラブ事務局 編集責任者 ボランティアコーディネーター 加藤 悦奥 〒232-8555 横浜市南区六ツ川 2-138-4 Tel. 045-711-2351 (代表)

ホームページ https://orangeclub.kcmcvolunteer.com ブログ https://blog.kcmcvolunteer.com

神奈川県立こども医療センターの5月











写真:総合待合の五月飾り(左上・右上)、屋上庭園(右中) 5階家族待合コーナーのきょうだい児さんへのキット(左下)、本館1階のお花(右下)

コロナ渦で改めて考えた病院ボランティアの活動

オレンジクラブ副代表 患者図書室 高橋 奈緒美

昨年12月に発令された緊急事態宣言でオレンジクラブの活動が自粛となり、解除後の3月末、3か月振りに医療センターでのオレンジクラブの活動が再開となりました。

久しぶりに訪れたセンター内は、吊るし雛やお雛様が飾られており、以前と変わらない温かい様子に 自分自身の心も和ませられました。この 1 年に及ぶコロナ渦で、感染症の知識とその予防に関する知 識を得られたように感じます。活動を再開するにあたっては、自分が持ち込んでしまうのではないか という不安を抱え、本当に活動しても良いのか?という事が常に頭にありました。どんな注意を払い、 どんな活動が必要なのか。今までと違った活動の形を考える必要があるのではないかと感じました。 私が活動する患者図書室もコロナ前とは大きく様変わりしました。初めての緊急事態宣言が出て以来、 人数制限を設けたり、本やデスクを消毒し、こちらから子ども達やご家族の方に声をかけることもな くなりました。 以前は、 子ども達とパズルや塗り絵、 折り紙を折りながらご家族の方の声に耳を傾け、 子ども達とおしゃべりをしたり。病院が嫌な場所ではなく、楽しみな時間もあると思えるような、図書 室でありながらちょっとホッと出来るコミュニティの場となるように自分なりに考え、活動し、やり がいも感じていました。夏休みや春休みに入るときょうだいの子ども達も訪れ、部屋は満杯!ご家族 の方たちが部屋の外で待っている光景もしばしば。しかし、今回の感染症の事態は、病院ボランティア の在り方を考え直させられる機会だったように思いました。重篤な患者さんも多く入院、通院してい る医療センターでは安全が大前提。当たり前の事ですが、忘れかけていたように思います。以前、図書 室を訪れた患者さんの中には、病気の為にぬいぐるみや本など、触れるものはすべて消毒しないとい けないお子さんもいました。その話を聞いたとき、ご家族の方々が大変な思いをしていることを感じ ながら、そのような子ども達への対応を考えなかった事を今になって反省しています。活動前の検温 や体調チェックは勿論の事、子ども達1人1人の事を考え、配慮した活動の仕方も考えていかなけれ ばと思いました。折り紙や、塗り絵、ぬいぐるみなども片づけられ、入室する子ども達の数も減った患 者図書室ですが、今の形が本来の病院の図書室としての姿なのだとも思います。そのような中でも、以 前のようなご家族や子ども達が笑顔になり、楽しそうな会話が聞けるような患者図書室を目指したい です。

子ども達の元気と笑顔のために・・・・オレンジクラブの大きな活動目標や、職務では出来ないような、お手伝いや寄り添いが求められるこども病院のボランティアの必要性は、コロナ前とは変わらないと思います。活動するにあたっての注意事項や活動の方法、患者さんやご家族の方々との接し方などなど・・・少し立ちどまって見直しをし、活動を控えたり制限するというよりは、今迄と違った方法で、今迄のような手伝いや寄り添いが出来る事を考え、オレンジクラブのメンバーでも話し合っていかなければと思いました。

美ら海水族館 オンライン遠足を体験して

5 西病棟保育士 石谷





5 西病棟では初めてオンライン遠足を体験しました。沖縄にある美ら海水族館とオンラインで繋い

でジンベイザメがいる大水槽など見学しました。また、水族館の飼育員の方とクイズをしたり質問に答えて頂いたりと盛りだくさんの内容でした。子ども達にとって、とても興味深い内容だったようで水槽の中の様子を見ながら「すごいね!」「見に行ったことあるよ!」など会話が弾み、とても刺激的な時間でした。子ども達からは、時間が足りないほどの質問があり、水族館の飼育員さんとのやりとりもとても嬉しかったようです。イベント終了後には、「サメってすごいね」「ぼく、今度は実際に見に行ってみたいな」など胸を躍らせ友達同士で会話しているのが印象的でした。

今回のイベントを通してコロナ禍で閉鎖的な空間になりがちな中、普段では体験できないことを経験し、子ども達にとってより刺激的で気持ちが昂る体験になりました。また、このような機会を大切にして子ども達にとってより良い体験が出来るよう企画していきたいです。

アートワークショップ

こども地球基金 アートワークショップリーダー 鳥居 晴美

小児病棟のプレイルームや個室での絵を描くワークショップに入るのが毎月楽しみでしたが、なかなかコロナが収束せず、今は渡り廊下に子ども達と絵を描いています。

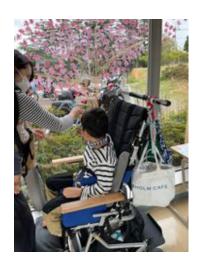
先月は春の花や樹々を描きました。

参加してくれた外来に来ている子ども達や入院している子ども達は口々に「前々からここに絵が描きたかった。やっと今日描けた。」と嬉しそうでした。夢中に描いていると、もっともっととつい時間を忘れてしまう子ども達がお母様に早く行きましょうと促される場面も多く見受けられます。この日も長年ボランティアで入っている二人の仲間とこんなに子ども達に喜んでもらえるなら遠くから来る甲斐があるわね、と私達もとっても幸せな気分になりました。

25人のお友達が参加してくれたお陰で病院の廊下がいっぺんに明るくなりました。みんな病気に負けず明るくて、沢山のエネルギーをもらいました。「今度はいつ来てくれるの?」と聞かれるのはとっても嬉しいです。

原 チカちゃんが描いてくれた桜とお花見の絵には 一日一日を大切に! という言葉が添えてありました。病気と毎日闘っているからこそ出る言葉に教えられました。チカちゃんは心臓病で調子の良い時しか描けないから次は参加できるかな?と話していました。夢は小説家になる事だそうです。みんな医療機器を付けていたり、車椅子だったりと不自由だけど、描いてる時は病気も忘れて前向きになれると言ってくれた子どももいました。私達は一切病気の事やプライベートな事は聞きませんが、不思議と絵を描いていると病気の事や自分の夢を子ども達は語り出します。

漫画家になりたい!医者になりたい!等と話してくれました。毎回子ども達と 子ども達が描くアートとの出会いに心ときめいています。次回の訪問も心待ちにしています。





キクちゃんは40年余り、横浜訓盲学院に通っている。

20年前までは吉竹恵子さん(シンスケさんのお母さん)と、その後はぽぽんたの渡辺千春さんと続いている。毎月1回で年間11回のおはなし会だ。JR山手駅から竹之丸の学院まで坂道を上っていく。昨年は新型コロナウイルス感染症まん延で、3月~6月は休校、行事は中止になり7月からスタートした。外部から通う私たちは、体調管理を慎重にして、電車乗り継ぎの人混みに気を付けて、空いている車両を選ぶ。「訓盲学院の幼児児童生徒さんは、様々な基礎疾患や既往症があり感染リスクが高い人がほとんどです。」と学院長はおっしゃっている。それでも外部の力を学びの支えにしたいとおっしゃる熱意はとても嬉しいしそれに応えたいと心から思う。今年は5月からスタートだ。年間予定日表を見ながら、この予定表通りに実施できますようにと願う。

さて、5月のキクちゃん担当は、小学部中学部の10名だ。子ども達の顔が浮かぶ。 おはなしは何がいいかな? 絵本は何がいいかな?

《今後の予定》

5月10日(月) ボランティア調整会議 14:00~ 第1会議室 (Web 会議)

6月 7日(月) ボランティア運営会議 14:00~ 講堂 (Web 会議)

《舞台裏…感染対策取りながら~》











次回の夏飾りに向けて すでに準備開始